

発行・古平町史編纂室
文化会館 842・2590
第192号 平成17・9・1

古平の歴史

カレイ漁は川崎船を使つてい
ましたが、それに電気チャッカ
を搭載する船が現れ、次第に発動
機船による漁が行なわれるよう
になつてきました。次ぎのよう
な船が売買の記録があります。

この漁業は青森県で行なわれていましたが、道南周辺から岩内地方に入つて来て、岩内では昭和八年一隻が着業したとあり、その後、ホツケ漁を目的に二〇が統余りが着業したとあります。古平では先号で紹介したように港町吉井市松が、大正二年、後志

布施 多七 山田 宗吉

一 日 不 要 傳 八 抄 卷 四
 又 日 不 要 八 抄 卷 三 六 〇 卷
 卷 八 抄 八 月 九 抄 卷 七
 大 身 不 要 八 抄 卷 七
 又 抄 八 月 七 抄 九 抄 卷 七
 大 身 不 要 八 抄 卷 七
 竹 子 四 月 抄

合計金 百〇五兩七匁七釐九

內一金六角天衣、五車、一手數料

一金九取上

一全九取、一米、一有運料

一金封、土才、通信一國

1

金瓶梅詞話

終言於土者也

引仕切金正金 御渡申上候間御落手

の旨是非御通知被下度候也

20

主客の調和を計り、風水や主客方の相剋を正しく述べたところから、

の走らざるは新教示下されて何事不相侵新引文要下度千高御印上

月之九日
傳
千葉傳藏

大
中
P
殿

1

馬込清七

吉藏
中山
未藏

豆府 口口 元府

須貝久四郎

金藏
本間兼次郎

金瓶梅 石印本

氏名不詳一名

大正一三年、続く

▼三月三十一日

昨日は稲鯨から帰りずいぶん疲れたので、七時半起床、今日は珍しい小春日和だ。洗面後、あちこちと散歩する。ウグイスのどかにさえずり春らしい。妻から葉書がくる、幸治の片商合格のこと、外に五人が合格したこと。鯨漁は二六日まで毎日時化で投網できず、二七日から投網するとのこと。大漁を祈る。朝食後、縁側に出て日なたぼっこをする。太陽は青空に輝き、風も暖かく初めて春らしい気分だ。これからは一日増しにこうなるだろう。三月二九日の新聞を畳から借りて見る。二七日夜投網、余市一〇〇石、古平一〇石、浜益二〇〇石、増毛一〇〇石、塩谷一〇石とれたとのこと。古平は傘一杯、△、傘五モツコ、外刺網三〇〇四〇尾から五〇〇〇六〇〇尾までとのこと。いよいよ初鯨が来たのだ。岩宇方面は漁なし。配達さんの話で、昨夜、若林さんへ電信があり、積

丹の若林さんでは三〇〇石とつたとのこと。事実とすれば実に大漁でめでたい。縁側で新聞を見ているとウグイスの声、スズメなど、平和な楽園だ。ハエも初めて飛んでいるのを見た。ツバキ、梅はまだ蕾だが、この暖かさで五、六日中には咲くだろう。一時頃、古平から電信が来た。「ニューガクシキ八ヒマイハ マニサンハイツツトレタ」、午後

ウグイスの声のどこかで春らしい、いよいよ四月だ。北海道も追々暖かくなるだろう。若林では二九日夜、三七〇石漁獲したとのこと。その後聞くと、三〇日夜二六〇石、合計三六〇石の大漁だ。古平はその後、模様ないとのことだが如何。午前中、長へ行き小樽新聞の三〇日を見る。まだ各地も大した漁もないようだ。午後一時、自転車で行く。後、八幡へ夕

高野名幸作さんの日記から

《103》

当時の世相を見る

三時頃、芳太郎さんと自転車で行った。玉分、権四郎、中川、遠藤などに寄る。石分寺、安佛寺も参詣するが、ボカボカと暖かい天気で心地よい。五時頃に帰る。夜食後、母さんと高太郎さんの嫁さんのことについていろいろ話す。一〇時、戸外へ出て見る。星は満天に輝いてよい夜だ。明日は快晴ならん。

▼四月一日

三時頃、芳太郎さんと自転車で行く。五〇円から一〇〇円くらいまでいろいろある。のち河原へ行き三時帰る。夜、竹田、中川さんが遊びに来ていろいろ話す。

▼四月二日

起床六時、洗面後、御宮の境内まで散歩する。珍しい程の快晴、そして暖かい。朝食後食へ行き高太郎さんの嫁さんのことについて話をする。後、中畑へ行き酒肴を馳走になる。いよいよ明日は帰る予定なのでそろそろ支度を始める。

▼四月三日

今日は名残惜しくも佐渡を出発し帰宅する日だ。母さんは四時頃から起きていろいろと支度をして下さる。五時起床、朝食後、中畑などへ行き暇いする。老人とは永の別れになるかも知れぬ。六時に馬車が迎えに来る。皆さんと会うときはよいが別れる時は心残りだ。願わくば、皆さんご健体であられんことを。六時二〇分、ヒサさん、治平老婆と三人で馬車に乗り込む。大勢が送ってくれた。芳太郎さんが自転車ではいまだ送ってくれた。七時四〇分エビス着、早速船に乗り込む。小雨が降り出したが海はナギで、一一時半新潟着。浜には曾我さん夫婦が迎えに来てくれていた。いろいろ世話になり、人力車で新潟駅へ行き、一時四五分発で郡山に向かう。八時二〇分郡山に着く。一二時二〇分まで時間があるので、郡山市外を散歩する、立派な店が沢山ある。今日佐渡丸の船中で、古平の日本間の主人と会いびっくりした。古平の漁況を見ると、三一日夜二〇〇〇石、

一日夜三〇〇〇石、合計五〇〇〇石、美国出は七〇〇〇石とったとのこと、近辺ではよい方である。

▼四月四日

昨夜、郡山一一時二〇分発の汽車に乗ったが、混んでいなかったのて乗った。

▼四月五日

今朝、余市着。正午の外浜丸で古平へ帰る。

▼四月六日

起床八時、去る月一八日旅行以来、昨日までずいぶんあちこち歩いて疲れたので、今日は八時まで休む。二十日間程の間に、古平もずいぶん雪が消えた。そして気候も春らしくなった。寒さもさほど変わりなく、佐渡にいたときと同じ服装をしている。留守中の書面やら帳簿などを調べる。品物の貸付も相当あるが建網関係は以外と出なかつた。鯨漁は今朝はさらに無い。

昨夜五時ごろから暴風(タシ風)になったのでダメだろう。夕方浜へ出て見る。風はすっかり止み海も静かで、大小の船が無数に出て必死の活動だ。内地の漁から見れば北海道の海は何でもとれる。これを利用して加工会社でも興したら確

かに有望ならん。明日、幸治を小樽に連れて行くので支度をする。

▼四月七日

幸治を連れ、小樽庁商の入学に出席する。時化で困った。四時頃小樽着。岡崎で休む。

▼四月八日

庁商の入学式に八時に出発する。九時から始まる。終つて入学後のことについて説明などがあり、一二時に終わる。昼食後、工藤下宿へ行く。いろいろと買ひ物があり、七時に下宿へ帰り、今夜はそこへ泊まることにする。

(四月九日〜二日まで欠)

▼四月一二日

昨夜は一漁あらんかと期待したがダメ、沢江方面は全く無し。刺網の薄漁は全くの予想外。刺網連もあせつてゐるがわれわれにも大打撃だ。

▼四月一三日

鯨漁、刺網皆無で意気消沈する。熊さんへモッコしよ。東洋からイワシ網一〇反委託で送つて来た。人間は正直が第一、正直にさえておれば、他から信用を受けて商売も出来るようになる。今後

▼四月一四日

鯨漁、入船町岬で二、三杯、以下二、三杯、歌葉山中で五、六杯、刺網は薄漁、今日は合計一〇〇〇石余り、今までで合計一萬石余り、刺網の薄漁は何十年振りの稀なこと。ことに港町から浜中、沢江方面は甚だしい。二、三本から良くて四、五本だ。積丹では若林大漁、本漁場も三〇〇石取ったとのこと、私は小樽から帰つてからは方々気味で休んだり起きたり、熊さんは今日も八へモッコしよに行く。佐渡の吉岡、稲鯨ほか、あちこちへ礼状を出す。幸治から手紙が来る。

▼四月一五日

鯨漁、入船町方面は引き続きある。二、三杯あり、熊さんが行く。沢江、歌葉方面の薄漁には驚く。毎日天気でナギが続いている。こんなときに大漁があればよいが実に気がもめる。美国、積丹、入舸方面は大々漁、余市、古平方面は負けた。古平では美国から生鯨を買つて来ている。刺網連中から素人まで毎日二〇〜三〇杯買つて来る。積丹若林では今までに四千石もとつたという。近村では稀な大漁だ。本漁場も大漁。

▼四月一六日

今朝、入船町岬と群来村方面で漁があり、種金は三杯もとつたとのこと、期待している沢江、歌葉方面では建網、刺網共にさらに無し。中は五杯ぐらゐ、刺網は大不漁だ。われわれにとつては沢江、歌葉方面の刺網連の不漁は大打撃だ。二〇日頃までには大漁でありたいものだ。三、四日も休んでいたが、今日は九時頃に起きた。店は閑散、カレ針買ひの客があるぐらゐのもの、一〇時頃種金から、昨年の畑賃貸で鯨をくれるという電話があり、阿部さんの舟を頼んで熊さんが乗つて行く。三時頃帰つて来たが、舟一杯の鯨に家では大喜びで大騒ぎ、家中総出でモッコしよいだ。四時頃終わったが、これだと八、九本分はあるだろう。舟の札に阿部へ二本分やる。夜、雨になる。今夜の鯨漁は如何。幸治から手紙が来た。

▼四月一七日

起床七時、昨夜も割りと薄漁だ。美国は近年稀な大漁とて、古平から手間取り、その他商人達が美国から買ひ鯨をして来る。もう千石程も買つたろう。家では昨日の鯨の鯨つぶしをやる。約八本程あつた。

午後八時頃から鯨模様があるというので大騒ぎ。一〇時頃には沖村方面から△、○では代わり棒として大騒ぎをしている。刺網も今夜こそ意気込む。私は力の浜から沢江方面まで行つて見る。名月はこうこうとして、海は曇を敷いたような上ナギだ。こんなときに大漁したらどんなにか面白いだろう。沖に停泊している船が皆見える程の月明かりだ。一一時休む。明日は必ず大漁ならん。

▼四月一八日

鯨大漁、漁獲高およそ一万石、本年第一番の漁だ。昨夜来、鯨模様あり、この分なら大漁ならんと期待していたら、三時頃からガヤガヤ人の声がしていたが、これで浜もすっかり元気づく。私も五時起床、浜へ出て見る。ナギで漁船、発動機船、それに汽船などで海も隙間がないようだ。入船町から沖村にかけて七、八か統が起している。三〇杯ぐらいはありそうだ。浜中から沢江まで棒一四、五杯もかかったというので、キリ声での沖揚げで賑やかだ。刺網は割合掛からぬとのこと、上で二〇本ぐらい、下は七、八本ぐらいか。大漁の割りに刺

網は負けている。今日はどこもモツコしよいを頼んで歩いている、断りきれぬ程だ。熊さん、コノさんは因へ行く。父は吉治を連れて因の浜で鯨拾いだ。四〇〇尾も拾つて来る。妻は鯨割きで忙しい。珍しい好天気ですナギだ。夜は一五日の月光がこうこうとして、何やらまた鯨のありそうな夜、一二時頃休む。モツコしよいで町は賑やかだ。

▼四月一九日

起床七時、天気快晴、鯨漁は一、二杯ぐらいずつのようだ。幸治から昨日手紙が来たので返事を出す。熊さんとコノさんは今日も因へ行く。妻は今朝から今村の納屋場へ出かけ、種金から貰つた鯨割きをする。今日は命日で和尚さんが来られたが、忙しくて支度もできなかった。鯨場中はどうもこの通りだ。父はこの頃気分が良いとて何かとやる。酒を飲むがあの程度なら薬を飲むより良いのだろう。私も午後二時頃から納屋場へ行き鯨割きを手伝う。周りでは四、五〇人が話をしながら鯨割きをやっているの賑やかだ。

▼四月二十日

昨晩はナギも良し、月夜で静かだ

から鯨漁あるだろうと期待していたが皆無。本年の漁はサツパリ張り合いがない。殊に刺網は一〇本から三〇本ぐらいだから、何十年もないという不漁だ。沖村と群来村方面では平年の漁があつたとのことだ。積丹方面の大漁は本年はナギ続きだからだ。漁期中、本年のよなナギのまわりも珍しい。一回も大シケなしに過ぎた。今村裏の鯨割きに妻、コウさん、熊さんにも行く。午前中で終わつた。身欠は上等の鯨をつぶして一回も雨に当てずに割いたので、実上上物が出来た。天気は良し、風はそよそよ、鯨の干し上がりには最高の天気だつた。今夜も静かで模様も良さそう。しかし、鯨の盛漁期は過ぎたように思う。樺太への出稼ぎに、古平からは五〇名余りも出るという。鯨場、鯨場と待ち望んでいて楽しんでたが、これからは一日ごとに浜もさびしくなる。

▼四月二一日

就寝中から春雨がシトシトと降っている。春の雨音を静かに聞きながら休んでいるのも気持ちのよいもの。しかし、鯨製品には雨は大禁物だ。鯨漁はさらに無し、聞けば、美

国は昨夜も一万石とか、ほんとに竜神さんもこのところ不公平だ。古平へも来ればちやうど良かったのだが、なかなか思うようにはならぬ。美国、積丹の漁はナギまわりのせいとも言えるが、本当に時化は一度もなかった、こんなこともない。妻は幸治への小包づくりをしている。新潟のサヨさんと、京都の繁夫さんへ身欠を小包で送る。鯨の盛漁期も終わり活気も薄くなり、樺太への出稼ぎ者もポツポツ出発する。

▼四月二二日

昨夜来からの雨、今日も一日中降っている。海は時化だが、昨夜は投網した。本年は漁期中での時化もこの程度だつた。納屋掛けの鯨はこの雨でポタポタ落ちて目切ればかり出る。鯨場には今頃の雨は禁物だ。店は閑散、私は古い帳簿、書類、雑誌など片付ける。夕方浜へ出て見る。まだ波はおさまっていないが、漁期中なので波をおして建網、刺網を投網している。今夜あたりドツサリ大漁して景気づけてくれればよいが。夜、久し振りに本に行き、話をして九時帰る。

▼四月二三日

就寝中の六時頃、余市から電話

がある。妻が聞いたところ、与太郎さんが余市に着いたので、午前中の船で来るとのことだった。佐渡行つたときは共にアバ縄買いなどに歩いた。鯨漁はなし、美国は昨夜もまたとれたとて、奥生鯨一俵分が来る。今年は刺網連のほか素人でも買い鯨をすることが多く、町中はそのために忙しい。美国方面の大漁、竜神さんも余りにも片寄つて不公平だ、どうか古平にもドツサリ来てもらいたい。午後三時頃、高太郎さんが来る、トミが迎えに出る。浜も陸も買い鯨で忙しい。夜、佐渡の話をする。成田校長が高島転任、後任は寿都から来られた。

▼四月二四日

起床七時、天気快晴。鯨漁は昨夜はホンの少しばかり、あちこちで半杯から一杯ぐらゐの漁、留萌、増毛方面の鯨漁が見えるようになったから、古平はいよいよ終漁ならん。この間からの雨もようやく晴れ上がったので、皆鯨割きに一生懸命だ。幸治から手紙が来た。学校にも慣れ、万事愉快に学んでいるとのこと。時々下宿で校長先生から面白い話を聞いたり、お菓子など馳走になつてゐるとのこと、幸

せなことだ。剣道道具代一七円かかるがどうするかというので、買つてやることにする。

▼四月二五日

起床七時、鯨漁は無い。大正一三年の鯨漁も最早九分通り過ぎた。建網は相当だったが、刺網は何十年来の稀なる不漁だ。われわれの方もこの分だと未収も多からう。また、明年の刺網の売れ行きにも影響するだろう。何事も思い通りにはいかぬものだ。漁場ではどこも鯨割きの目切れがあり、鯨粕炊きなどで忙しいことだ。私は帳簿の元帳上げをする。ユノさんは手伝い、熊さんは目切り編みなどやる。夕方、六時頃から雨になる、八時頃になると雨も強く風もまじつて時化模様になつてきた。店で日記をつけていると、この雨風で船を上げてゐるのだろうか漁夫連の掛け声が聞こえる。漁夫連もなかなかゆるくない仕事だ。漁業者もなかなか骨の折れる事業だと思ふ。幸治へ剣道具の返事を出す。夜、高太郎さんと佐渡、新潟の話などする。

▼四月二六日

昨夜来の雨、今日も一日中降り続く。納屋の鯨は目切れになり、

ポタポタ落ちるのでどこも頭痛の種だ。高太郎さん、積丹へ行くつもりのところ雨で道路が悪いので見合わせた。店は今日も閑散としてゐる。鯨粕は日増しに下落、目下のところ二七〇〇〜二八〇〇円、胴鯨二二〇〇円、数の子二二〇〇円くらいだ。

▼四月二七日

起床七時、聞けば今朝、歌棄種金で二〇杯もとつたとのこと。昨夜来の雨も今日はようやく晴れた。鯨製品は早く乾かさねばならぬのだ。幸治が世話になつてゐる小樽岡崎さん、大山校長さんに礼状を出す。午後一時から火防組合の巡回で、二条、三条通りを廻る。火防も注意せねばならぬが、雪解け後の下水、その他、衛生もずいぶんひどいところがある。四時に終わり帰る。

▼四月二八日

天気快晴、鯨干場にはよい。母の命日で和尚さんが来られる。高太郎さん、七時頃積丹へ陸行する。町中は雪は全く消え自転車を出した。熊さんは八へ粕干しの手伝いに行く。夕方浜へ出て見る。沖には建網が見え、刺網もぼつぼつ見える。今

は納屋場の仕事の方が忙しい。この頃は浜もさびしい。二十日も過ぎれば浜はひっそり閑としてさびしくなる。また一カ年を眠つて暮らさねばならぬ。鯨漁が終ると漁村もさびしいものだ。

▼四月二九日

一日増しに暖かくなる、冬シャツも衣替えだ。しかし外は冬の頃と変わらなく、じゅばんと半天の重ね着だ。鯨漁も終漁だ。刺網も網洗いをやつてゐる。春先は元気がよかつたが、漁も不漁で終わつて、片付けるときは何となくさびしい。今日あたりからポツポツ納屋下ろしが始まる。本年の貸方帳簿調べをやる。合計一七五〇〇円余りある。本年は刺網が不漁ゆえ三、四千円は未収分ある見込み、二二〇〇円ぐらゐの集金があればよいが、仕入れ、借方約七〇〇〇円だから、アバ縄仕入れでも、他から融通しなくてもよい。精々集金せねばならぬ。大正一〇年一万五千四百余円、一一年二万一千六百円、一二年一万五千七百円、一三年一万七千五百円、建網は例年より二千元以上不足、刺網は三千元以上多く出た。

(続く)

教科書のいまゝむかし

◇興味のある教科書ゝ続く

国語でも世界との関係を重視して、「アメリカ便り」「トララク島便り」「世界」「ナイヤガラ滝」「ヨーロッパの旅」「南米便り」など、諸外国をテーマにしたものを取り上げ、これまでの教科書とは全く一変したものでした。

中でも「アメリカ便り」は十ページ余りにもなる長いもので、世界地図を掲げ、まず日米の交通路を示し、ハワイ、サンフランシスコ、シカゴ、ニューヨークなどの位置を教え、旅行に出かけた太郎の父が、アメリカ合衆国の物質文明のすばらしさに、いちいち驚異の目を見張って見物している、というような内容になっています。

そして終りに、

「……アメリカ人は、大きいこと、広いこと、高いこと、早いこと、何でも世界一になるように心掛け

ているといいますが、何しろ大した勢いです。」

とあります。(文章は現代かなづかいに直してあります)

修身の教科書では、今まで全くなかった「国交」ということが付
←アメリカとヨーロッパの紹介



け加えられて、国際社会が対等に、互いに利益を交換し合つて、人類の進歩に貢献しなければならぬことを強調しています。

要するに、目を世界に広げさせようとしているわけで、これは今までにない全く新しい考え方でした。それにとりなつて、西洋人が戦前の教科書の中では最も多くとり上げられています。「リンカーンの苦学」「トマス・エジソン」「チャールズ・ダーウィン」「ベートの「月光の曲」などです。

また国語教科書の特色として、児童の発達段階にも考慮が払われ、児童に興味のある長文の物語がとり入れられたことです。「サルカニ」の物語は十ページにもなり、「モモタロウ」も十一ページあります。この桃太郎の教材は前の二期の教科書ではわずかに二ページでしたから、どうしたら児童にとつて興味のあるものを与えられるか、ということを重ねて視していたことがわかります。

◇逆行した歴史

大正時代にはデモクラシーといふことが強調されましたがそれ

にも限界があつて、国語や修身の教科書とは逆に、この大正期には歴史が国史と書き換えられ、神話が教材として圧倒的に多く出てきて、次ぎの昭和時代(国定四期)に出てくる神話が全部ここに出そろふことになりました。

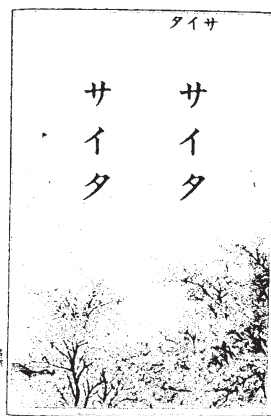
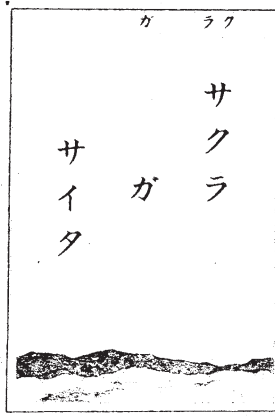
戦前の小学校教育を受けた人には懐かしい? 「天の岩屋」「大國主命」「八岐の大蛇(やまたのおろち)」などがこの時期から初めて現れ、昭和時代の教科書に引き継がれることになりました。

◇昭和時代の教科書

大正期の第三期に引き続いて、昭和八年から使われ始めた教科書が国定四期の「サイタサイタサクラガサイタ」の時代です。

昭和六年、日本軍の大陸侵攻によつて満州事変が起きました。この頃から国内に軍国主義が勢いついてきて国家主義の教育が強化されるようになり、しぜんと教科書もこれに基づいたものがつくられるようになりました。見たところ大変のどかで、文学的な表現として受け入れられていた「サイタサイタ サクラガサ

「イタ」の表現にも、児童を知らず知らずのうちに国家主義の考え方に引き入れようという意図がみられ、「サクラ」も、当時盛んに言われていた武士道のあらわれだと解釈されていました。



この文章に続いて「ススメススメヘイタイススメ」が載せられていて、児童は入学するとすぐに「兵隊」ということを教えられていたが、この教科書は昭和十五年、全国の小学校が国民学校と改称されるまで使われました。

また、昔から長い間ずうっと読み続けられてきた古典も重視されました。「源氏物語」「枕草子」「万葉集」も初めて載り、日本の文化的遺産を児童に伝えようとしていますが、天皇を中心とした神話が多く取り上げられています。巻三(三年生)に載っている「国びき」は次ぎのようなものです。

← 古典として教科書に初めて載った「源氏物語」

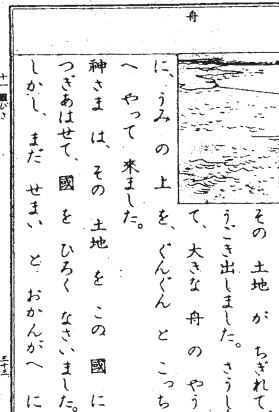


「大むかしのことです。神さまがどうしてもこの国をもつとひろくしたいとおかんがえになりました。国を広くするには、どこかのあまった土地をもつて来て、つぎあわせたらよからうと、おかんがえになりました。神さまは、うみの上を、ずっとお見わたしになりました。すると東の方のおい国に、あまった土地のあるのが見えました。そこで、神さまは、その国に、太い、太い竹を書けて、ありったけの力を出しておひきになりました。……

神さまは、こうして日本の国をひろくなさったということです。

（この文章も現代かなづかいに直しています）
しかし、この第四期の教科書は児童や父母に歓迎されました。それは教科書が色刷りになり、表紙の色も黒や灰色から青色になつて、全体と

← 神話から「国びき」



して今までは違った明るいものになり、一見して新鮮な感じがしたからです。
内容でも今までの読本とは違つた点があり、特に教材を児童の生活に合うように、文学的な内容も重視されています。編集も児童のこころと発達段階を考慮して、その点から教材を選び、配列の仕方にも考慮の払われていることがうかがわれます。

集治監(刑務所)の設置と続

古く時代には重罪人は徒刑(といひ島流し)や流刑(島流し)などで島に送られたが、その中の重罪でも佐渡・隠岐・伊豆などであった。いまNHK大河ドラマの源義経が活動している鎌倉時代には、蝦夷地が流刑地とされていたこともあったが、江戸時代の終り頃には、江戸から送られて来た罪人が白糠や茅沼の炭山で使役されたり、久遠場所(現在の檜山支庁大成町)や奥尻島で漁業労働をさせられていたという例もある。

これらは明治三年には廃止されたが、徒刑・流刑者の行き先として北海道が選ばれるという理由があったのである。

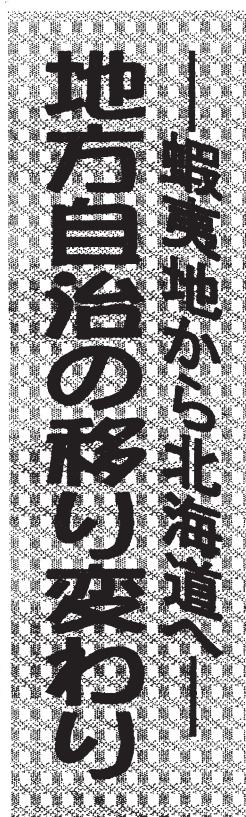
明治一四年に初めて設置された樺戸集治監に続いて、空知、釧路網走、十勝と次々に五カ所に集治監がつくられ、明治三年頃には約七〇〇〇人が収容されていたという。これらの囚人達は、後の重要な政策を進めるための炭山や鉱山での労働、道路の建設に使役され多くの犠牲者を出し、後にはこれに代わるものとして悪名の高い土工部屋、通称タコ部屋が生まれた。

北海道庁時代

開拓使が設置されてから次第に北海道の開拓が進んできたが、本格的に新しい段階を迎えるようになったのは、明治一九年の北海道庁の設置である。

まず同年一月、札幌・函館・根室の三県と事業管理局が廃止され、新たに北海道庁が設置された。

この三県に分割して道内を治めるといふのは、どう考えても実情



——蝦夷地から北海道へ——

に適したものでなかった。三県のそれぞれの広さ、地域の文化的な条件などを見ても大きな格差があり、函館・札幌両県にはとくくの対抗意識が強かった。

初代長官に就任した岩村通俊は、翌二〇年五月、全道の郡長・区長(差し当たり現在の市町村長)を集めて道政施行の基本方針を演説し、はじめに次ぎのようなことを述べた。(要点をまとめると)

「北海道は新しい土地であるので、

内地と同じような制度によらず、簡便な方法をもつて治め、開拓を進め産業を盛んにすることが必要である。それなのに今までは、本道の政策はこまごまとしていてわずらわしく、形式にとらわれすぎて無用の日時と、莫大な費用を使いながら、開拓の現状から見ると、ものは少ない。このことから政府では、三県一局を廃止して北海道庁を置き、複雑で無駄な組織を替えて、単純で簡易な組織に改めた理

由である。その要点は内地の制度を模倣することを止め、開拓に適した政治を行なうことにあり、虚飾と無駄な事務や費用を減らし、開拓と興産のために、緊急にして必要な事業を起すことである」

ここでの要点は、北海道は新しく開かれた土地であるから、何事も内地と同じ制度によらず、単純で簡易な方法によって治め、開拓と興産の成果を実現することが必要であることを述べたのである。

岩村長官の挙げる重要な政策というのは一八項目あるが、その中の主なものをあげて見ると、

- ① 函館・根室両支庁の廃止
- ② 小学校教育の簡易化
- ③ 官営工場の民間への払下げ
- ④ 水産税の軽減と出港税の廃止
- ⑤ 土地・鉱山の測量
- ⑥ 地理・鉱山の測量と道路の建設
- ⑦ 港湾の修築と灯台の建設
- ⑧ 移住の奨励と手引書の作成
- ⑨ 農工業の奨励
- ⑩ 水産物製造の改良と販路拡張など広範囲にわたった。

古平郡内の水産税

北海道庁となり新しい政策の一つが水産税の軽減であったが、古平郡ではどのような状況であったかを見てみると、明治一三年それまでの海産税を物産税と改称し税率を改正したが、各郡の課税率は同じではなかった。古平郡では漁獲物の製造高に対し、次ぎのような率で課税された。

身欠	製造高の一割六分
胴鯨	同
鯨・粕	一割
鮭	一割
鱈	一割

漁獲高の二割 など
生売りの場合も売買価格に対し同

じ税率で金納であった。

名称が変わっても物産税の高いことは漁業経営者の不満であり、農業に比較してその高率であることを訴えた。明治二〇年北海道水産税則の公布によつて改正されたが、この税則はそれまでの三千年の水産物産出高の価格を平均した、一カ年分の価格の百分の五を税率としたもので、今までの四分の一ほどになり、現品税が金納に改められたので、煩雑な手数も省かれた。

税の徴収については郡ごとに水産営業人組合を設置させ、その中に員を置き、その負担方法を協議させた。古平郡での委員は九名で、外に収税委員官選二名がいて徴収の事務に当たられた。官選の二名には関口利勝・仲谷勇次郎が任命された。

← 収税委員の辞令・関口利勝

関口利勝

古平水産物産営業人
組合収税委員 今入

明治三年五月十一日

北海道廳

■道府県制となる

明治四年廃藩置県の詔勅が出て、それまでのほとんどの藩が県と名称が変わり、それが現在の四七都道府県になるまでにはいくつかの段階があつた。

明治二年、まず全国の各藩主から版籍奉還(自分の領有する土地と人民を朝廷に返すということ)。このことはわが国の封建政治が終り、中央集権へと移つていく大変革で、これによつてはじめて廃藩置県が行なわれることになった。廃藩置県から現在の四七都道府県制に至るまでには、さらにいくつかの段階があつた。

まず廃藩置県の段階では、それまでの藩をそのまま県に変えただけなので、版籍奉還時の二七四藩から、自主的に廃藩した一三藩を差し引いた二六一藩がそのまま県になつて、それ以前からの県と大小合わせて三府三〇二県と、大変な数の県となつた。

しかし、効率的に中央集権体制を進めるには、このように三〇五府県もあつたのでは煩雑でもあり、ある程度は県の広さもそろえる必要があるため整理して、それが三府七三県となり、すぐに三府七二

県となつた。

では北海道はどうかというと、ただ一つの藩であつた松前藩は、明治維新後に館藩(たて藩)管轄していたのは道南の福島・津軽・松山・爾志の四郡と名称が変わり、明治四年、弘前県に併合されたが、弘前県はすぐに青森県と改称になつた。

← 館藩の四郡が弘前県に併合



その後も府県の数については手直しが続き、明治九年(一八七六)には現在の形に近い三府三九県十北海道開拓使十琉球藩となつたが、分離独立した藩もあり、北海道開拓使が三県(札幌・函館・釧路県)体制から北海道となり、沖縄が県となつたので、これで四七道府県となつた。昭和になつて東京府が東京都となり、全体の数は変わらないうが、ここに現在の一都一道二府四三県となつたのである。

小樽外六郡役所

明治二年、浜中村に開拓使大五区古平郡区務所が置かれ、古平・美国・積丹郡を管轄したが、明治三年、古平郡役所となり、明治五年、開拓使が廃止され三県時代になると札幌・古平外二郡役所と改称された。北海道庁時代になると再び古平外二郡役所となつたが、明治二年、小樽外三郡役所(小樽・高嶋・忍路)に合併され、小樽外六郡役所となつた。

行政の組織も簡易化に努め、郡区長は警察署長を兼任し、郡書記は警部・警部補を兼ね、警部や警部補もまた郡区書記を兼任し、巡査も本務の外に行政事務の補助的な仕事もするという状況であつた。

北海道庁初代局長 田中 隆
任北海道古平郡濱港入船新地丸山町詳永澤江歌兼沖村戸長兼北海道廳警部補



明治三十九年六月二日

→ 戸長が道庁警部補兼務の辞令

姉のHUNKトーン

大澤 文子

八月中頃の暑いさなか、私は千歳空港の待合所にいた。

「姉よ、われの着くまで生きませー」と念じつつ、今し機の発つを待ち、心落ちつかぬまま待合所の中をうろうろと歩き廻っていた。

九州の板付飛行場までは二時間六分かかる。

やがて、私は青空一色の板付飛行場に足を下ろしていた。福岡市郊外のF病院までは車で رفتても数十分かかる。しばらくぶりに福岡の街並みを車窓から眺めているうちに早、F病院に着いた。

四階の窓側近くのベッドには、かすかに呼吸する布団の動きを見た。思わずかけ寄り、そつと姉の手に触れた。ふと気づいたのか姉は気だるげな目を見ひらき、

「ああ、お・か・あ・さん」と、きれぎれに母の名を呼ぶ。こみあげる涙をおさえ、私は「うん、うん……」

と返事をした。

大学の二ヶ所もかけもちで数学の教授をしていた姉、幼い頃より元気で「勉強のむし」とよく言われていた姉だったのに、九州の空気が合わなかったのか。それでもエレクトーン奏者として九州の教会へ通っていた姉だったのに。

やや時の過ぎた頃、やつと妹と分かったのか姉は、「フミチャン……」と小声で呼び私の手に触れた。あふれ落ちる涙をおさえ、私は幾度も「ウン……ウン」と返事をし、姉の細い手を握った。やや経ち、姉はうつらうつらと眠りに入っていた。

九州の盛夏は暑い、私は病院の売店から氷菓を幾度か求め、ひととき暑さをこらえるのだった。

ふと、部屋隅にあるポリパケツを見た。マジックで姉の名がかかれていた。
「ああ洗濯バケツかな」

と思い、早速中庭の干し場らしい箇所を見つけ濯ぎものをすることにした。

少し元気をとりもどしている患者さん達であろうか、お互いに楽しそうな声をかけ合いながら濯ぎものをしている。中庭の干し場の陰あたりの木々のしげみの中には、ふる如く夏蟬が鳴いていた。

私も患者さん達にまじり姉の濯ぎものをするにした。干し場の竿にはそれぞれ患者の名がつけられていた。

そのうちに別の患者さん達が決められた「安静の時」が終了したのであろうか、三々五々中庭の藤棚の下に集まり楽しそうに憩いあっている姿を眺めた。

「いいなア」早く姉も元気になって、その仲間に入るとうれしいなアと祈る思いにかられるのだった。

病室の窓からみえる個所に高層ビルが建っていたが、アドバリンが空高くあがりゆくのが清しく見えた。

また窓下に見える洋館の窓には葦簾がかけてあり、時折り白い浴衣着の人がうつり、やつぱり南国だなアと思った。
「またあしたネ……」

夕方近くにはきまつて姉にかけると言葉ではあるが、私を追う姉の弱々しいまなこがつかつた……が、そつと病室をあとにする私だった。

いつも夕焼けの空がうつすらと何か物悲しく私を包みこむ日々だった。ようやくわれにもどりの心の落ち着く公務員の宿「Mホテル」にたどり着くのだった。幾度か宿泊したことのホテルなので気安く、そして楽しく泊まることができる。

朝食はきまつてコーンフレーク、牛乳、パン、卵、野菜サラダ等々だった。私の好みの献立だったので朝食の一つとして満足感を味わっていた。

あれから幾年経ったであろうか……。相会うことも稀にして、いつか私は博多の姉のマンションのブザーを押していた。ドアを開ける所作にも手間どる姉ではあったが、亡き父母のことにふれゆくと何を思ひしか、つと立ち上がりエレクトーンに向い賛美歌を弾きだした。われにも唱えという。あれから経ちゆく日々は幾年か、エレクトーンは今わが書斎の隅に……。ひそやかに奏でいし賛美歌の音を残して……。

札幌通信 第33信

終戦六〇年六朝「蓮」

吉 川 義 雄

「戦後六〇年」と新聞にも、雑誌にも、大きな見出しの特集が載る。

竹槍訓練中の日本に、一九四五年(昭和二十年)八月六日の朝、原子爆弾が広島市に、九日の十一時には長崎市に。

八月十五日正午、天皇の玉音放送なるものがラジオからながれ、戦争が終わった。

本来、持つて生まれた各自の宿業にもよるが、本質的には、各自の生命は自由であるべきはずだ。如何に美化しよう、戦争とは、やつてはならぬ、人間の最悪の行為である。

軍服をつけた異様な集団、職業軍人の群れが五・一五事件。二・二六事件と次第に国内で巾を利かせ、昭和六年の満州事変

以来、軍国主義の泥沼は止まるどころを知らず、昭和十二年七月、蘆溝橋事件を引き起こし、以来、大本営を設けて戦時体制をつくり「国家総動員法」を公布して、日本は軍人の好きなようにできる国になってしまった。

好きでこの国に生まれ、青春を謳歌する時期に戦争とは。

不運を嘆く暇も無く、若者達は片っ端から戦場に送られた。

昭和十六年十二月八日。ハワイの真珠湾を攻撃し、アメリカとイギリスに宣戦布告をするに至った。

人間はモノではない。生産の間に合わなくなつた兵器を補充するために、人間の犯す罪惡の極限ともいふべき「特攻」を考えて

「桜花」だ「神雷」だと、殺人器械と人間を組み合わせた兵器を、現実にそれを使用し出した。

人としてこの世に生まれ、父母の慈愛や周囲の祝福の中で、故郷の山河に護られて育つた尊い生命が、殺人兵器に括りつけられ、今また、他国で育つた同じ生命を破壊するために飛び発つのだ。

基地から飛発つてゆく特攻機に、わずかの期間に、いったい何度帽子を振つて送り出したことか、勿論、二度と友の顔を見たことはない。

人には、心して聴かねばならぬことがあるようだ。

今から二千数百年前、ネパールの一小国に王子として生まれた釈尊は、王位を捨てても「人は何のために生まれてきたのか」の、答えを求めて出家した。

易々として出てくるような答えではない。釈尊もまた、当時の修験者達に混じつて、苦行の限りを尽くしたという。

苦行の果てには何もないことを悟つた彼は、菩提樹下で冥想に入り、幾日かの後、明星の頃忽然と悟つたのが、彼の究極の教えとなつた「法華経」の哲理であつたようだ。

この哲理の偉大さを宣揚するべく、さらに千年後に中国に出現した天台大師は、「法華経」の哲理を「一念三千」論として、生命の尊厳を余すところなく説き明かした。

悲しいかな、釈迦仏法の効用は釈迦自信の予言通り、正、像二千年で終え、末法の最悪の世になると。

しかし、釈尊の予言は的中し、生命に及ぶ受難の末に「法華経」のめざす、あらゆる生命に「仏界」という、尊厳の生命が備わるとする大哲理を、万人が理解し、実践できる「本尊」として、願した人が鎌倉時代の日本に出現した。

日蓮仏法の確かさは、現実世界に広布され、戦争を忌避して平和を構築する、一大勢力になりつつある。うれしいことだ。

中戦

泣き笑いの 樺太漁場体験記

後戦

吉 野 慶 一 郎

終戦と同時に発動機船団で逸早く婦女子の引き揚げを実行したものの、不運にも真岡港でソ連軍の艦砲射撃に合い、九死に一生を得て帰港して以来、再度決行を計画

必要な燃料の隠匿、それにエンジンの消音装置なども考案して、細心の準備を重ねて密にその時を待っていました。

三月を迎え空には春を告げるゴメが賑やかに舞い、浜にも活気がみなぎり、戦前の漁場風景が懐かしくよみがえってきたような感がありました。しかし、この頃になつて親父が少し体調を崩し、医者に通うようになりました。本人は「大したことはない心配するな」と元気をよそおっていました。

いよいよ四月になり、支度も最後の段階に段階に入つた頃親父はついに床につき、床の中から毎日私に指図するのでした。鯨場も発動機船もすべて準備が完了し、大安吉日の網卸しの日を二、三日後にひかえたある朝、親父が「鯨起こし船の準備が必要だ。前組合長（故人）のところで借りて来い」と言うので、今年は休業す

る前漁業組合長宅へ伺い頼んだところ快い承諾を得て、喜び勇んで帰宅し親父に報告しました。

この返事待っていたらしく体を起こし、「そうか良かったナ、これで安心した。ドレ、ひと眠りするか」と、横になりました。この笑顔での言葉は最後に一時間後、ひと眠りならぬ永遠の眠りについてしまいました。網卸しを目前にして、その後すぐ押し寄せる銀鱗輝く初鯨の姿を夢にえがきながら……

海の宝庫とも言ふべき樺太に憧れ、第二の故郷と定め一族で移住して十年、自分のやりたい限りの仕事をやり遂げてきた本人としては、樺太で生を終えたことはむしろ本望であつたらうと諦めもつきました。急遽、野田町の真宗全昌寺の住職に依頼し葬儀万端を終えると、網卸しの祝いを言い、父の跡を継ぐ羽目となりました。

船頭さんを始め、今日からは私を親方と呼ぶようになり、何かテレくさく奇妙な感じを受けました。しかし、全員心を合わせ和やかな雰囲気の中で私を支えてくれました。

いよいよ建網漁が始まると、待っていたごとく鯨が押し寄せて好

漁が続ぎ、ソーラン節や沖揚げ音頭の威勢のいい響きが沖から伝わってきます。陸揚げされた鯨は全部ソ連が引き取り、野村丞次郎さんが責任者の水産会社の冷蔵庫や大きなタンクに塩蔵します。ソ連兵士も運搬などの仕事に出て大忙しです。慣れない仕事に軍服を泥だらけにし、疲れ切った表情で働いている姿もユーモラスでした。ソ連軍から割当の漁獲目標はすぐにも完了しましたが、さて代金の支払いはどうなるのか、その方が不安で、もう鯨は獲れなくてもいいと思う程でした。

一方、密航予定の発動機船も準備万端整え天候の良い夜中を狙っていました。ふしぎに思っている調べてわかつたことは、他の漁場でも密航計画をたてていた連中が、『吉野の船か逃げるそうさだ。先に行かれては自分達が出にくくなる。何としても後にならないうように、家の船頭に、今夜はソ連の警戒監視が厳しいから気をつけよう』などと、親切ごかしに出港を牽制していたのでした。それを信じたばかりに、家の船頭は遂に出港の機会を失つてしまったのでした。

四月の出漁までにはまだ相当の日時があり、余裕をもつて準備は順調に進みました。船も安全に航海が出来るよう十分に整備をし、

半田陣地陥落す く続き

中央軍道近くまで出て観測の結果、亜界川付近から撃っていることがわかり、早々に引き上げ報告した。

夕方だった。負傷兵を取容に行くことになり、大隊本部の要員に全員集合の声がかかった。私は銃を置いて行く気にならず持つて行くことにした。気がついたら初年兵の中村正道がいなかった。どうしたのだろう。山家に聞いたが分からないと言う。

敵の砲弾の直撃を受けたか、それとも機銃掃射でやられたのか、しかし、今は探している暇はない。これが戦争だと自分に言い聞かながら担架を持ち、中央軍道まで行ったら、一〇名程の負傷兵がトラックに乗

せられていた。ほとんどが重傷者で、どうにか歩けるのは一人だけだった。師走川陣地で負傷したらしい。

老兵の綴り方

あ、樺太国境守備隊

33 橋 義 春

全員を担架に乗せて、大隊本部の仮包帯所の幕舎まで運んだが、辺りは真つ暗になり、私は銃を持つていたので担架は担がず、護衛兵として最後尾を歩いたが、敵が出没しているものであまり気持ちよいものではない。

八月十三日

師走川陣地陥落

北極山へ撤退

朝、タコつぼの中で目を覚ましたら、昨夜運んで来た一〇名程の重傷の負傷兵が、仮包帯所から一人も居なくなっていた。どこへ消えたか分からな

はないかという噂が流れた。或いはそうかも知れぬ。

昨夜、亜界川以北に退いた敵は、午前四時頃早くも動き出した。師走川陣地の方向から「ドン、ドドン……」という砲声が続いてくる。

師走川陣地には四中隊、速射砲中隊、歩兵砲小隊が布陣しており、昨日、師走川陣地の二度の攻撃に失敗したソ連軍は、増援部隊を得て三度目の攻撃を仕掛けて来た。わが軍も敵の猛攻にたいし一歩も引かず奮戦し、押し寄せて来る敵を陣地の前面で殲滅、撃退していた。

木下大尉が大隊長代理として、師走川陣地へ戦闘指導と部下の激励のため行くことになり、ラッパ手の私が護衛として行くことになった。これから最前線に向かうのだが、いっどこで敵と遭遇するかも知れず、何としても木下大尉を守らなければと覚悟を決め、軍靴を地下た

びに履き替えて出発した。中央軍道歩くのは危険なので、道路の側溝を姿勢を低くして、膝まである水の中を師走川

陣地まで進んだ。近づくにつれ砲声と銃声が入り乱れて、「ドン……バリバリ……」と、大きくなってくる。その中を警戒しながら、やつとの思いで陣地に到着することができた。

木下大尉は戦闘状況を視察し、作戦指導と部下の激励をして回った。負傷者が多く、収容する建物も幕舎もないので地面に寝かせているだけである。顔面と喉を撃たれた負傷兵が呼吸するたびに、「ゴボ、ゴボ」と血が喉から噴き出してくる。その血の匂いを嗅ぎつけて蚊がいっぱい顔に群がってくる。それを衛生兵が白樺の葉っぱで追いついていく。この負傷兵に、このくらいのことしかできないのが最前線なのだ。私も見かねて蚊を追いついて手伝いをしたが、あの負傷兵はどうなったであろうか。今でも鮮烈な印象として残っている。

敵の攻撃がますます激しくなってきた。木下大尉も用務を終えると、私と二人で今来た道を戻り、無事、大隊本部に帰った。

△続く▽



古平俳句会

名水を汲む人絶えずえぞの春	月下美人開くを待ちて寝もやらず	門火焚くゆらゆらゆらと部屋に入る	聞こえ来るエンジンの音夏霞	開け放つ居間に百合の香漂へり	背の山も眼下の海も夏盛る	岩つばめ高きうねりに身じろがず	慈雨うけて痛みし胡瓜の伸びてをり	夏空に風が見えてる大風車	希望とはみなぎる力雲の峰	峰雲や積丹岳の上に座す	句の詠めぬ日ばかり夏の雨つづき	雲の峰嶺に居座りをりしかな
斉藤波留	山口悦子	越野敏雄	大和田絵伊	高橋重子	仲谷比呂古	室谷弘子	泉清三	外山俊久	渡辺嘉之	堀典子	本間寿昭	越野清治

円空仏

瀧内優子

年年に心寄せ来しみ仏にまみゆる水無月あやめ咲き満
 円空の遺せるみ仏十二万體なかの一体禅源寺秘仏
 あらあらしき斧鉞のあとをとどめたる円空仏は半跏普坐なす
 荒あらと刻める円空仏まなじりのあたり深きかなしみ見る
 右膝を立てて頬杖なすみ仏おのづからにし寂まりおはす



み仏の黒き肌へにひそやかに掌を重ねみし彼の日かへらず
 幾百年のひとのおろがみ嘆きけむみ仏よはひを重ねたまはず
 荒あらとみ仏刻める円空の思惟をかの日も今日もおもひぬ
 円空仏の黒き肌へにうるほひを帯びると見れば夕かげの差す
 毛導にとめぐれる円空海越えて蝦夷熊石に帯洞の跡

悠

雄詠「九月号」主宰水見壽男

蝦夷富士の裾に点々鯉幟 山口悦子

新樹なく昭和山出湯けぶる

白樺の白より白く辛夷咲く

大樹なる椿に歴史あるものを

武者人形一步も引かぬ面構へ【句評】 越野敏雄

夏の雲ちぎり絵のごと彩りぬ

病窓に湧き出でし雲夏めける

大輪の牡丹微笑み亡妻在す

せせらぎを抱きそよぎし谷若葉 高橋重子

わだかまり静かに流す夏の川

花時に逢ふ約束が又過ぎて

山里にひびく草笛わらべ歌

入替り枝を渡りて囀れる 仲谷比呂古

薄らと木の芽色づく峡の径

膨らんで色ほつと花の山

境内の骨董市の夏日影

潮風に活魚のごとく鯉幟【句評】 室谷弘子

夏霧に出船の出鼻くじかるる

日本海今が盛りの小女子漁

小女子の光もろとも糶られけり

北国の春に大地が躍動す 外山俊久

森林に若葉が芽吹く日和かな

まず一服香り樂しむ新茶かな

石楠花の露に集まる夏の蝶

波飛沫光にふれて夏立てり 渡辺嘉之

日暮きて若葉の匂ひ漂へる

落日を卯浪の砕く神威岬

羊蹄山を映して蒼き湖薄暑

夏霞観音岩を包みけり 堀典子

白牡丹咲き静まりてをりにけり 巻頭【句評】

脈々と雨に透かせる若葉かな

天心に小女子火もゆる沖近し

海色の青吐き出して夏来る

噴煙の如し一湾雲の峰 本間寿昭

群生朝日集めし河原路

初夏の風女人禁制岬渡る

網手繰るやり鳥賊噴きし顔の墨

若葉風わが影一步先を行く【句評】 越野清治

早春の怒濤怒濤の岬かな

潮鳴を遙かとしたる若葉風

釣上げし鳥賊啼くこゑを聞きにけり

灘の風空の風なる谷若葉

怒涛

[2]

古平俳句会

— 九月 —

働ける生活の汗でありしかな 斉藤波留

独居となるも運命や盆の月

呆然と蛇の木登り見たる朝 山口悦子

駒草や山と見立てて石並べ

唄に慣れ囃子に慣れて盆踊 越野敏雄

金婚を誇りて妻の墓参

潮の香と夏霧に明け港町 大和田絵伊

鉢植に実梅しつかり育ちをり

樹木よりくる涼しさに時忘れ 高橋重子

夕焼に残れる潮の岬しづか

釣糸をぐぐつと引かれ波涼し 仲谷比呂古

朝顔をすべて摘み取り母愛し

ここよりは海一望の夏座敷 室谷弘子

洒落心まだ残りある浴衣かな

子等の曳く山車の献灯燿ひり 泉 清三

空と海浮かせ見せたる揚花火

梅雨明や深き森にも日の匂ひ 外山俊久

夕風の新辺を駆ける人と犬

雲の峰崩れしままに波起し 渡辺嘉之

海渡る風に涼しさありにけり

雷の海に転がる天の音 堀 典子

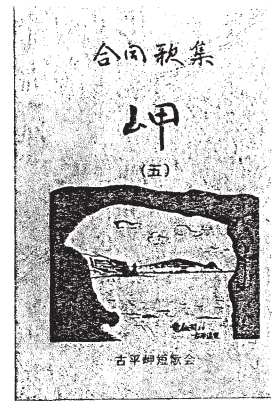
潮風の吹き抜けてゆく晩夏光

蒼海の積丹半島海びらき 本間寿昭

この夏も妻と昼餉や浜の小屋

雲の峰近づく兆し風に聴く 越野清治

万緑を育む蝦夷の大地かな



→古平町岬短歌会創立四十周年
記念歌集『岬』(表紙)

ひばり鳴くチニカの丘にひと日あそび香に立つわらび手に
手に帰る

竹内 コト

夏祭り時代を写し変わりゆく年に一度の若さもやして

田中 香苗

板谷邸に松の風呂を見学すまはりに広がる懐かし松葉の香

丹後 初江

父の日にももの賜りぬそを告げて他界せし妻に手合はせたり

寺内 りよう

端居する足許に来て喉ならす老猫のをり風の出でくる

東 美知

遠き岬見て立つここに汐騒の音運びくる風の涼しも

堀 典子

短歌

古平町岬短歌会

根分けして友持ち呉れしアツツ桜われ居なき夏の夏庭に咲く

池田 テル

新しき肥料の効きしサフニアの花の紅いろ目を射るばかり

鈴木 時子



→古平町岬短歌会会員記念撮影
(平成十七年八月二十日写)

秋分

9月の暦を見ると[白露][秋分]などがあります。これは1年を24に区分した(二十四節季)中の1つで、7日の[白露]はいよいよ秋も本格的になり、草木に露が宿るようになるということです。北海道では真夏でも夜露がありますからあまりピンときません。「暑さ寒さも彼岸まで」と言われていますが、祝日である「秋分の日」はよく知られています。

昔から彼岸の中日として仏事が行なわれていますが、字の通りこの日は7日間ある彼岸節の中間の日で、以前だと各家庭でおはぎを作って近所に配ったり、お墓参りをします。おはぎかぼたもちと言われますが、食べるほうにとってはどちらでもいいのですが、ただ近ごろは家庭で作るようなことはなくなり、便利な市販のおはぎかぼたもちで彼岸を迎えているようです。

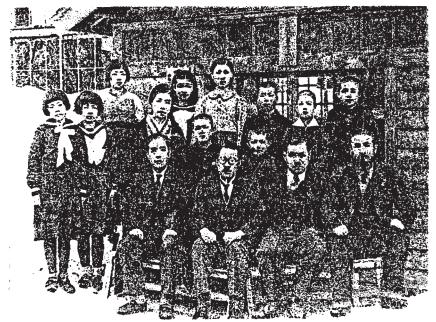
古平町史年表

昭和15年(1940) ~ 続き

- ▲明治神宮奉納聖火リレーに青年団や児童が参加し、余市町から聖火を引き継ぐ
- ▲古平町が紀元二千六百年記念植樹をする
- ▲浜町恵比須神社で浜町大火の鎮火祭が行なわれる。社殿に柵が設置される
- ▲アスパラガス会社(喜茂別村)へ女工の出稼ぎが増え、この年80余名が出発する
- ▲役場屋上に防空監視哨が設置され、防空監視員が任命される
- ▲学校では焼夷弾を想定した避難訓練が行なわれる
- ▲町営による木炭製造がチョペタンの沢で行われる
- ▲古平商業組合が組織され理事長に越中庄七が就任する
- ▲8月2日真夜中に積丹沖を震源とするかなり強い地震が発生する。特に大きな被害はなかったが、この地震でローソク岩の一部が欠け落ちる
- ▲紀元二千六百年を記念して、高野平治ほか3人が古平小学校へ二宮金次郎銅像を寄贈し除幕式が行われる
- ▲国民体力賞検定会が中島グラウンドで行われ、合格者には初・中・上級のバッジが与えられる
- ▲古平青年学校が道の視察校に選定される
- ▲古平小学校校門前に、浜町郵便局長高野良一寄贈のトドマツを補植する
- ▲日・独・伊三国同盟を祝う国民大会大行進が小学生も参加して行われ、終わって古平小学校で町在郷軍人会主催の映画会が開かれる
- ▲歌棄山中の山火事で、風が強くかなりの被害がでる
- ▲築港荷揚場の築設工事が竣工し、祝賀会が古平小学校で開かれる
- ▲古平信用組合創立25周年記念式が古平小学校で行われ、終わって組合階上で祝賀会が開かれる
- ▲水見悠マ子が戦線句集「蘆山」を上梓する
- ▲稲倉石小学校が2学級編成になる(児童数99名)
- ▲稲倉石鉱業所が、元山~堤の沢間の索道を港町の貯鉱所まで延長する(総延長約12km)、港町事務所で祝賀会が開かれる



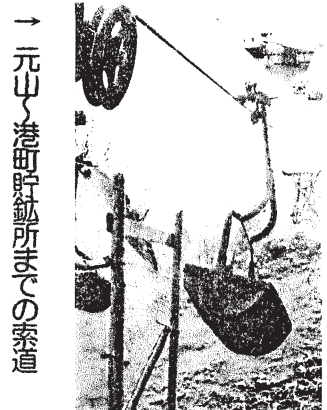
↑ 当時の古平信用組合店舗



↑ 稲倉石小学校 15年度卒業生



↑ 中継地の出戸の沢選鉱場



→ 元山~港町貯鉱所までの索道